

北朝鮮の金王朝と李氏朝鮮

新井 宏

為政者の評価などいつも時代と共に変わる。

足利尊氏は戦前の国定教科書で「天皇に弓を引いた逆臣」と書かれていた。それは朱子学名分論の影響を強く受けた水戸学が、正統な後醍醐天皇を放逐した逆賊として尊氏を位置付けたことによるが、実際は明治政府による「王政復古を正当化するため、建武中興で親政復活を果たした後醍醐天皇の功績を際立たせる必然的な評価」であった。

戦後になると、皇国史観が批判され、実証的な研究が進展したことにもない、いまでは尊氏を逆賊とする見解はほとんど見られず、一般には吉川英治の『私本太平記』の尊氏像が広く受け入れられている。

伊達騒動の佞臣原田甲斐は、山本周五郎の『樞ノ木は残った』によって忠臣に蘇った。

歴史評価などというものは、立場によっていくらでも

変わるの当然であるが、韓国でも、再評価が進んでいる王に光海君がいる。

李氏朝鮮の五一八年の歴史で二十七代の王が生まれたが、その内でふたりの王だけ、すなわち燕山君と光海君のみが、王名(廟名)を与えられずに、廢王・燕山君とか廢王・光海君と呼ばれている。かれらは、いずれも皇帝ネロのような暴政により、自らの意志に反して退位させられた王というのが従来の評価である。

ところで、いま北朝鮮の「金王朝」では金日成・金正日・金正恩の三代世襲が進んでいる。金正恩は三男であり、長男の金正男を差し置いて、王世子(世襲者)に至った過程を見ると、おどろくほど李朝の歴史と共通点がある。「金王朝」は宗主国・中国の勅許(誥命)を得るのに、四苦八苦していたのである。

一言で言って、李朝は王統継承をめぐる血の争いの歴史

史である。嫡子と庶子、長男と次男の違いが厳格でその待遇は天と地ほどの差があった。光海君の父、宣祖は、側室の生んだ庶出の初めての王であり、そのため四十一年間もの長い政権を維持しながら、大きな制約を受け、劣等感に悩まされていた。

光海君も有能な政治家でありながら、庶子でしかも次男という身分の上に、強勢化しつつある女真族の後金(後の清)に対応するため、宗主国の明王朝の言うままにもなれず、中国王朝から王権継承の勅許(詔命)がなかなか得られなかった。

このような環境の中では、王位そのものが極めて不安定で、対抗勢力がいつ長兄である臨海君や嫡子である永昌大君を担ぎ出して王位に狙うかも知れない状況であった。そのため結局、兄の臨海君や、幼い弟の永昌大君を殺害する結果になったが、それは、今も進行中の北朝鮮における権力闘争の未来を予見させるものでもある。

暴君燕山君

確かに第十代燕山君は暴君であった。

コロンブスがアメリカ大陸を発見し、ポルトガルとスペインが、トリデシリヤス条約を結んで、勝手に東洋の分界を決めていた一四九四年、日本では北条早雲が小田原に拠った頃、燕山君は十八歳で即位した。

即位するとまもなく、世子の頃の儒学の師を殺し、続いて士林派に押さえ込まれていた勲旧派や外戚派と組んで、名分と道義を諫言する儒学士林派を「戊午士禍」という事件を通して追放し、完全に朝廷を掌握した。その過程では、故人になった者にさえ遺体の首を切る「剖棺斬屍刑」を加えたり、多くの士林を処刑後に首・胴体・手足を切る「凌遲処斬」という極刑に処している。

李朝では、「四大士禍」と称される大事件が四回起きているが、「士禍」とは士林が肅清され禍を受けた事件との意味であり、燕山君の「戊午士禍」がその始まりであり、そこに示された残虐性は、暴君の手始めにすぎなかった。

その後も、妓生を集めて毎日饗宴を開き、伯母に当たる月山大君夫人を陵辱し自殺させるなどの事件を起こしているが、暴走がとまらなくなったのは、やはり、実母が政争の中で廢妃とされ、ついには死薬を与えられた一連の事件を知ったことであった。

燕山君の母、成宗の妃・尹氏は嫉妬深い性質で、成宗の寵愛を独り占めにしていたが王が後宮たちと夜を過ごすのが多くなると、彼女らを毒殺するために砒素を隠し持っていた。

これが発覚して、せっかく勝ち得た王妃の身分から再び嬪(側室)に降ろされそうになったが、何しろ次代の王の母であり、いったんは事が収まった。ところが、嫉妬

深い性格の彼女は、成宗の顔に爪で傷付ける事件を起し、ついに廢妃とされた上に、庶人の身分に落とされてしまった。

それを主導したのは成宗の母、仁粹大妃である。それは姑の嫁に対する妬みもあつたであろうが、これに、韓明澮らの勲旧勢力も、名分を重んじる金宗直らの士林勢力も加勢した。金宗直らは、成宗が勲旧派や外戚を抑えるために登用した儒学者のグループで、士林派と称され、この頃から士林派は李朝の「政争」を担うことになる。

廢妃事件も廢妃のみに留まっていたならば大きな問題ではなかったが、なにしろ「政争の国」である。次代の王となるべき王世子の実母のことであり、これが勢力争いに利用された。次代の王に先行投資しようとして、廢妃・尹氏への同情論は日増しに強くなり、これに危機感を抱いた仁粹大妃は、実家に戻された尹氏が、まったく反省の気配を見せていないと虚偽の報告を上げて成宗にせまり、成宗はついに尹氏に死薬を与えてしまった。

燕山君は即位後も実母の廢妃事件のことを全く知らなかった。それは成宗が「百年間は廢妃問題を論じてはならない」と厳命していたからであるが、謀略渦巻く李朝のこと、燕山君がこのことを知るのに時間を要しなかつた。これを機に権力を握ろうとする任士洪の密告により、事件の全貌を知り、その関係者を皆殺しにする大殺戮を

行つたのが「甲子士禍」である。

まず、尹氏の廢妃に関与した成宗の後宮、嚴貴人と鄭貴人を宮中の庭で、目の前で斬殺させ、鄭貴人から生まれた安陽君と鳳安君を配流として上で死薬を送つた。それに反対意見をのべた者は僅かにいたが、殺害されるか配流されてしまった。

ましてや、尹氏廢妃の関係者に対しては、十余人が「凌遲処斬」の残酷な刑を受けた他、「剖棺斬屍刑」が加えられ、その他にも二十六人が残酷な刑に処せられ、彼らの家族、子供まで罪が及んだ。

その過程で、燕山君は実の祖母である仁粹大妃に頭突きを加えて、六十七歳で死亡させている。表面上は、祖母の叱責に耐えられずに行つた行為とされているが、もちろん母の廢妃・尹氏を死に追いやつた仁粹大妃への復讐であつた。これは儒教世界において、もはや許し得ない犯罪であつた。

さらには、全国に採青採紅使を派遣し、各地から美人を選抜して宮殿に集めて宴会を開くことなど狂態がますますエスカレートし、ついには国庫は破綻し、功臣に支給していた功臣田まで没収しようとした。

このような燕山君の狂的な行動は、もはや放置できない状況ではなかつた。一五〇六年、燕山君によって陵辱され自殺した月山大君夫人の兄・朴元宗が、成宗時代の実

力者である成希顔と共に起ち、クーデターは成功し、燕山君は江華島に流され、二ヶ月後に三十歳で死んだ。このようなクーデターを韓国では「反正」と言う。

歴史はこのような燕山君に対して、実録「燕山君日記」がクーデター派による一方的な史書であることから再評価を試みているが、どのような試みも未だに世論の支持は得ていない。

暴君といえ、どうしても皇帝ネロを思い浮かべるが、ネロの母、美貌のアグリッピナは皇帝クラウディウスの後妻となり、連れ子のネロを皇帝に据えるため、ついには皇帝を毒殺した。でしゃばりで、権勢欲が人一倍強かった彼女は、ネロが皇帝になってコントロールが利かなくなると、息子のネロに肉體關係を迫ったとも伝えられ、母の権力欲に恐れをなしたネロは、ついに母親の殺害を実行した。

ネロの母アグリッピナと燕山君の母、廢妃・尹氏を重ねてみると、そこに「血」を感じ、燕山君を冷静に評価できないのかも知れない。

改革派の光海君

第十五代光海君は、文祿の役(壬辰倭乱)の最中に、王世子となり、戦乱の終わった一六〇八年に三十三歳で王位に就いた。光海君は庶子の出身であり、しかも次男と

いう王位継承面では、極めて不安定な立場にあった。更に当時の国際情勢、すなわち、文祿・慶長の役(壬辰倭乱・丁酉再乱)は去つたものの、その復興の課題と、折から勃興中の女真族後金(後の清)の脅威に対処するため、「政争」が熾烈であった。光海君はまず王権を確立して、不安要因を取り除く必要があった。

そのため、対抗馬として擁立された兄の臨海君や、正室の嫡子で幼い弟の永昌大君を結局は殺害している。その他にも政争の最中、多くの犠牲者を生み出したのは事実であるが、李朝の政争の歴史をみれば、そのような類例は三十件ほどあり、光海君だけが極悪非道であったわけではない。

光海君の評価は、政権を奪つた仁祖が、そのクーデターを「仁祖反正」として正当化し、光海君を徹底的に悪く描いたことよつて疑いの多いものではない。

光海君が王世子となつたのは、壬辰倭乱の非常事態に際して、父の宣祖が北の義州まで落ちのび、咸鏡道に避難した光海君を分朝とせざるを得なくなつたためである。その直前まで、李朝では王世子冊封問題で深刻な勢力争いを繰り広げていたが、非常事態に至り、やむなく採つた処置であつた。

そもそも、壬辰倭乱に対して、李朝が何の備えもしなかつたのはこの王世子の冊封問題が大きく絡んでいる。

壬辰倭乱の直前の一五九〇年に、日本の実情と豊臣秀吉の底意を探るために送った通信使の報告が、西人派の正使の黄允吉と東人派の副使の金誠一で大きく異なっていた。西人派の黄允吉らは、日本が多くての兵船を準備しており、必ず侵略すると主張したのに、東人派の金誠一は、侵入する兆しもなく豊臣秀吉は恐れるほどの人物ではないと報告したからである。

通信使派遣の時までは、西人派の巨頭の鄭澈が左議政の座にあり、政治を主導していた。宣祖は既に四十を過ぎ、王妃は病に臥し、庶子の中から世継ぎを選ばなければならぬ状況であった。それにもかかわらず王世子を決めかねている宣祖に対して、鄭澈は東人派にも根回して、光海君を王世子として立てることを奏請した。宣祖が世継ぎを決めかねていたのは、長男の臨海君のためではなく、四男の信城君を寵愛していたからである。

しかし、鄭澈の奏請は、東人派の陰謀に利用されて宣祖の怒りを呼び、通信使の帰国の頃には、西人派の勢力が大きく後退してしまっていた。その結果、東人派の金誠一の意見が通り、民心を混乱させる必要がないと秀吉への対応が先送りされてしまったのである。

一五九二年四月十三日に、二十万人の兵力を以て次々と釜山に上陸した日本軍は、二十日後には首都の漢陽(ソウル)を陥落させ、加藤清正は北の咸鏡道まで一気に制圧

した。

その際に、咸鏡道に募兵に来ていた宣祖の長男の臨海君と第六子の順和君が、李朝へ反旗を翻した民衆によって捕らえられ、加藤清正に引き渡される。この時、四歳であった臨海君の子も捕虜となっているが、臨海君が釈放された時に、なぜか日本に残され、後に日蓮宗の寺院、白金台の最正山覚林寺と名古屋の妙行寺の開祖になったと伝えられている。

臨海君は光海君の同腹の長兄であるが、乱暴で激しやすい性格のため人望がなく、王世子には冊封されなかった。しかし目先の利く清正は、臨海君を丁重に扱い、親しい関係を築き、後に利用しようと考えたが、李朝における臨海君の立場は、それを許す状況ではなかった。臨海君は、捕虜になった屈辱から酒に浸り、ことあるごとに問題を起こしてますます人望を失っていった。

一方、光海君はなかなか人望があり、壬辰倭乱の時は、直接戦場を行き来し、実質的に戦争を指揮し、義兵や民衆を励まし、戦後処理にもあたり、権威を築いて行く。それは父親の宣祖にとって、自分よりも民衆から信頼され、人気のある息子と映り、面白くない状況をもたらした。

このようにして、戦時下の非常事態とは言え、いったん王世子に決った光海君ではあったが、「義兵を集めて来い」と死地へ送り出されるなど、問題が一段落したわ

けではなかつた。世子に冊封するには明の朝廷に報告し、「誥命」を受ける必要があつたが、明は長男の臨海君がいるとの理由でこれを拒絶した。

その上、宣祖の正妃である懿仁王后が亡くなり、その後には正妃となつた光海君よりも九歳年下の仁穆王后に永昌大君が生まれたため、光海君は王世子になつたとは言え、その立場は不安定であつた。

しかし、職責を着実に果たす光海君に対して、臣下の信頼は篤く、しかも宣祖が亡くなつた時に、永昌大君はわずか二歳であり、王位継承の決定権を持つ母の仁穆王后さえも、現実性がないと諦めて、ここに光海君の即位が決定した。

ところが、世継ぎ問題は簡単には収まらなかつた。光海君に従う大北派と永昌大君に従う小北派の政争が激化する。大北派と小北派は、元々は同じ少数過激派の北人であつたが権力競争の中で分裂した党派である。この二派の争いは熾烈で親・兄弟の仲でも党派の違いから敵同士となる場合もあつた。

その頃の派閥を概観すると、西人派を追い落とした東人派も、北人派と南人派に分かれ、更に北人派は大北派と小北派に分かれるという症状を示していた。西人派は政治基盤の強固な伝統保守派、東人派から分かれた南人派は西人派に近い穏健派、北人派は政治基盤の弱い革新

過激派と言つたところ。いつの時代でも政治基盤の弱い勢力は過激化し、分裂するのが宿命であるが、光海君の政治は改革性に富んでいただけに、少数過激派の大北派に支持され、それが悲劇を生むことになつた。

壬辰倭乱当時、直接全国を回り、戦争や民衆の生活を目の当たりにした光海君は、王位に就くと京畿道一円に大同法を施行する。それまで農民達は代貢収米法といつて家ごとに一定の貢納物と進上物を治めなければならなかつたが、大同法では保有する耕作地の広さに応じて課税し、農民だけでなく土地の所有者からも同じ基準で徴収して農民達の負担を軽減したのである。更には、焼失してしまつた代々の王たちの宗廟や昌徳宮などを再建し、関係が断絶していた日本(徳川幕府)と国交回復の道を開き、後金とも友好関係を追求して平和外交に努めている。いわば善政であつた。

ところが、明の王位継承に対する干渉から肅清の風が吹きはじめた。

明では、中国王朝の意向を無視し、長男の臨海君や嫡子の永昌大君を差し置いて、側室の子が王位を継承したことに異論が起り、ついには真相調査団を派遣するという事態にまで発展した。すでに王位は継承されてきたのであるから、明の態度は朝鮮と光海君を無視したものであつた。

もちろん、明の調査団派遣には背景があった。光海君の王位継承に反対していた小北派が明に要請したことは明らかであった。光海君に付いて勢力拡大を図っていた大北派にとってはもはや猶予ができなかつた。当時、長兄の臨海君は自分が王位を継承すべきだつたと公言し、露骨に光海君を誹謗していたからである。

大北派の中心人物たちは、臨海君が謀反を企んでいるとして死葉を送るよう光海君に迫るが、実兄のこともあり光海君は断固として拒絶する。しかし、大臣達が繰り返し強力に要求を続けると、結局、自身の意志を貫徹する事ができず、流配とせざるを得なかつた。その後、臨海君は重臣たちの放つた刺客により殺されている。

臨海君の死は、その後にくく肅清のほんの序幕に過ぎなかつた。臨海君の他にも、大北派を脅かす存在としては、小北派が支持する永昌大君と四男の信城君の養子の綾昌君があり、その除去が焦眉の急であつた。

その手始めが、一六二二年の「金直哉の獄事」である。大北派と光海君を追放する謀議を図つたとの理由で小北派の多くの人士が連座して処刑された。

かくして、小北派の追放に成功した大北派は、更に「七庶の獄」に絡めて、まだ幼いながら最も脅威的な存在である嫡子の永昌大君の除去を図る。

「七庶の獄」というのは、高級官僚のドラ息子たちが起こした単純な強盗事件であつたが、その取り調べの過程

で、資金を集めて幼い永昌大君を推戴し、母の仁穆王后に垂簾聴政を求めようとしていたとの自白を得る。

この事件の波紋によって、仁穆王后の父・金悌男は自決を命じられ、永昌大君は江華島に配流された上に、翌年には屋敷に火をつけられて幼い命が絶たれる。

もうひとりの有力な継嗣候補であつた綾昌君も同様な手口で配流された上で殺害された。その上、大北派が政権を独占すると一六一八年には、再び古い事件を取り上げて、仁穆大妃を廃位させた後、西宮に幽閉してしまふ。さすがに、これはやり過ぎであつた。

このように、光海君による反対勢力の抹殺過程だけを見ていると、朝鮮特有の政争だけが誇張されてしまふが、もちろんその背後には、国際情勢の急変があつた。

満州で女真族が勢力を拡大して後金(後の清)を建国すると、北方への備えは急務であり、壬辰倭乱からやっと立ち直りはじめたばかりの李朝にとっては深刻な負担であつた。しかも壬辰倭乱によつて国力を弱めた明からは、後金との戦いに援軍の要請が相次ぎ、いわば後金と明の間で、綱渡り外交を繰り返さざるを得なかつた。

宗主国の明の庇護下に入つて、後金と対抗するには、もはや明も李朝も力不足であつた。しかし、李朝の伝統的な士林勢力は、理念ばかり先走り、現実面での対応ができなかつた。いわば壬辰倭乱の二の舞であつた。

その中で、光海君は徹底した現実路線をとる。明の援兵要請に応え、姜弘立に一万の兵を与えて、出兵させたが、明が不利になると、適当に応戦したふりをして後金に降り、抑留されながらも光海君へ密書を送り、後金との和議交渉に臨むという巧みな両面外交を推進したのである。

もちろん、姜弘立の投降は極秘の政策であったため、彼の家族を誅殺すべきとの意見が相次いだ。光海君はむしろ家族に物品を下賜して保護している。

これにより朝鮮は明との関係を断つこともなく、また後金から怨みを買うこともないまま後金の情報を得ることが出来た。この後、朝鮮と後金は互いに国書を交わすこととなり姜弘立ら十数名を除くすべての捕虜は釈放された。

この後も光海君は、引き続き明と後金の双方との外交関係を維持し実利を優先する外交政策を展開した。ところがこうした光海君の外交政策を批判する者が出て来る。現実主義者が憎まれるのは歴史の必然である。その声の主は伝統勢力の保守派西人たちであり、西人たちは明に対する徹底し事大主義路線を固守し、一六一八年の仁穆大妃の流配事件を機に大北派への反撃の準備を始めていたのであった。

そして、「仁祖反正」クーデターによって、宣祖の五

男の定遠君の長男が仁祖として即位する。光海君は江華島に配流された後に濟州島に移され、十八年間生きながらえた後、六十六歳で死去した。

士林が東人と西人に分かれた年に生まれ、大北派と小北派の権力闘争の中で王に即位したが、また北人と西人の争いの中で王の座を追われたのである。

金王朝の金正恩

北朝鮮では、金王朝の三代世襲、すなわち、金日成、金正日、金正恩の世襲が既成事実化されつつある。

最初は、金正日の長男の金正男が継ぐかと思われていたが、二〇一〇年六月、金正日は三男の金正恩を伴い中国に赴き、金正男も立会いの下で、正恩が後継者に決まったことを、胡锦涛国家主席に報告している。この報道は、いかにも中国が北朝鮮の盟主国であり、かつてのように中国王朝が王位継承に勅許(詔命)を与えるかのごとき印象を与えるものであった。もっとも中国はこれを見て、このような金正恩と胡锦涛との直接会談はなかつたと、躍起になって否定している。

中国はもともと三男の金正恩の世襲に強く反対していた。そもそも、共産主義国家で世襲が続くなど理念上あり得ないのに加えて、中国に近い長男の金正男を差し置いて、三男の正恩が継ぐことなど、父家長制が伝統の中

国王朝としては認めがたかった。十五代の光海君の即位に反対したのと同じ理由である。

それにもかかわらず、金正日が中国を説き伏せたのは、中国にとつて、北朝鮮の崩壊が如何に深刻な問題であるかを物語っている。政治体制が極めて強固に見える中国ではあるが、沿岸部と内陸部の経済格差の深刻化に加え、少数民族問題はいつ内部擾乱に発展してもおかしくない潜在力を秘めている。もし、北朝鮮が崩壊して、難民が中国に流入すれば、比較的にうまく行っている朝鮮族問題に火が付くのは避けられない。

貧困の独裁国・北朝鮮は、核や長距離ミサイルをちらつかせて、世界を威嚇しているが、いまや世界の大国である中国をも翻弄しているのである。

核実験の事前通報を僅かに二十分前に行った北朝鮮。それでも中国が耐えているのは、北朝鮮の崩壊がいかに大きな被害を中国にもたらすか、冷静に判断しているからである。

もともと、中国にとつて御しやすいのは長男の金正男の方であった。マカオや香港に活動基盤を持ち、北朝鮮の外貨調達を担当していた正男は、中国政府内にも北朝鮮内にも侮れない力を持っている。

その証拠が、二〇〇九年四月初め、北朝鮮の平壤中心街に位置する「特閣」に、北朝鮮情報機関である国家安全保衛部要員が乗りこんだ「ウラム閣襲撃事件」である。

ここは金正男の平壤における根拠地だった。マカオや香港に主に滞在する正男が平壤へ来る度に滞在し、知人たちとパーティーなどを楽しむ場所である。

驚くべきことに保衛部要員たちを送ったのは異腹弟である三男の金正恩だった。父、金正日から後継者と最終的に指名された金正恩が、潜在的な脅威である金正男とその追従勢力を無力化させるために起こした襲撃事件だった。

同じ脈絡で見ると良く判るのが、二〇〇九年の年末に北朝鮮経済を崩壊直前まで追いやった貨幣改革である。これを仕組んだのが他にもない金正恩であったという米國専門家の見解が暴露サイトのウィクリークスに公開されたのである。

それは、貨幣改革の反対者に反正恩脈としてのレッテルを貼りつけ、正男派を一気に壊滅させる目的によるものであった。もちろん、貨幣改革反対の代表者はマカオにおいて、国際金融に通じる金正男であった。そのことは、最大の被害者である北朝鮮の住民たちさえ今では認識していたと言う。

北朝鮮の貨幣改革の影響は尋常でなかった。二〇〇九年十一月三十日に電撃的に断行した後の二ヶ月間、大混乱が起こっている。最も著しい現象は物価高騰であった。建前としては、物価の安定が目的であったが、直後

から物価は天井知らずのうなぎのぼりで、米は1キログラムたり二十ウォンから六百ウォンと三十倍にも暴騰し、円滑な食糧供給が行われず、餓死者が発生した。

これらの大混乱が金正恩の権力確立のためであったとするなら、李朝の権力闘争の再現である。貨幣改革の責任者が公開処刑されたのは、金正恩が身を守るために、生贄としたのに違いない。

だから二〇一〇年三月に起きた韓国海軍哨戒艦「天安艦」の魚雷攻撃による沈没事件も、十月に南北境界水域に近い韓国の延坪島を砲撃した事件も、正恩の権力確立のためのゲームと見なされているのである。

八月末、マカオと北京を行き来している長男の金正男が父の宿舎を訪ね、「金正恩が無理に貨幣改革を推進して失敗し、これを挽回するために天安艦事件を起こした。なぜ黙認するのか」と抗議したと韓国のKBSは伝えている。

また、金正恩の世襲が公式に発表された後の日本のテレビ局による金正男の衝撃的なインタビューで、「個人的には三代世襲に反対」と述べた上に、彼の祖国について、正式な名称「共和国」を使わずに「北朝鮮」と呼び捨て、危険水位を超えた発言をしたのである。

これを見て、韓国メディアは早速「平壤版王子の乱」と報道した。李氏朝鮮五百年の歴史は、政争と政権交代に伴う肅清の明け暮れであったが、そこではしばしば

「王子の乱」と称する兄弟間の殺戮が行われていた。最も有名なのは、三代太宗が兄弟三名を殺害する等によって王位篡奪した「第一次王子の乱」と「第二次王子の乱」であるが、燕山君の場合も、光海君の場合も、基本的には王子間の争いであった。

今回の王位継承も、李朝の歴史にしばしば現れた父家長制の伝統と先妃・後妃間の勢力争いの再現であり、正男の母・先妃の成恵琳と正恩の母・後妃の高英姫の闘争において、いったんは後妃側が勝利したことを意味している。しかし、金正日の病状によっては、正恩体制に不満を抱く北朝鮮国内勢力が正男を担ぎ出して、内乱に至る可能性も十分にある。

共産主義として既に六十年以上の歴史を持つ北朝鮮であるが、李朝と同じ歴史を繰り返すのは、何によっているのであるのか。さすがに、金正恩も中国にいる正男には手出しはできないであろうが、何が起こるかわからないのが、北朝鮮である。

本稿執筆にあたっては、その多くを朴永圭『朝鮮王朝実録』新潮社(一九九七)によっている。末筆ながら感謝したい。